The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本仏教における「行」の意味を考える ： 留学生教育の現場に求められる日本研究の一事例として
Author(s)	加藤, 均
Citation	日本語・日本文化. 2024, 51, p. 10-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95211
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈特別寄稿〉

日本仏教における「行」の意味を考える

―留学生教育の現場に求められる日本研究の一事例として―

加藤　均

（本稿は、2023 年 10 月 26 日に開催されたハノイ大学主催「第 4 回国際シンポジウム：日本語教育と日本研究～世界の潮流とベトナムの実践」における基調講演の内容に加筆・修正を加えたものである。）

ただいまご紹介いただきました大阪大学日本語日本文化教育センターの加藤でございます。

この度は、ハノイ大学日本語教育開始 50 年、並びに日本語学部創立 30 周年という大きな節目に開催されます「第 4 回国際シンポジウム：日本語教育と日本研究～世界の潮流とベトナムの挑戦」に、基調講演者としてお招きいただきましたことを、大変光栄に思っております。実は、私が、旧大阪外国語大学（現大阪大学）の留学生日本語教育センター（現日本語日本文化教育センター）に赴任いたしましたのは 1993 年度の終わりで、今年度末（2024 年 3 月）をもって定年退職となりますが、ハノイ大学日本語学部創立とほぼ同時期に大学人としてのキャリア形成が始まり、そしてその終わりに、このような記念すべきシンポジウムに参加できましたことに不思議な縁を感じております。

現在、私どもセンターは毎年、50 以上の国・地域から日本語や日本文化を専攻する学生を受け入れ、教育しておりますが、ベトナムからの受け入れで、もっとも歴史があり、かつ数が多いのはハノイ大学で、大学院の方も入れれば、修了生の数は 100 名近くになります。この会場の参加者の中にも関係の方々がいらっしゃるのではないかと思います。

さて、本題に入る前に、私どもセンターについて少し触れておきたいと思いま

す。

1954 年に日本政府によって国費留学生制度が創設されますが、その受け皿として設立されたのが、大阪外国語大学留学生別科で、これを前身とするのが現在の大阪大学日本語日本文化教育センターです。来年で創基 70 周年を迎える、留学生に対する日本語・日本文化教育の専門機関としては、わが国で最も古く、かつ最大規模のもので、教員数は常勤 25 名、非常勤 105 名の 130 名で、週に 400 以上の授業を提供しています。また、文部科学大臣認定の全国共同利用教育施設でもあり、我が国の留学生受入れ施策推進のための、教育実験校的性格も有しています。

2021 年 4 月には、自然豊かな山の中にあった旧大阪外国語大学キャンパスが、同じ箕面市にある、現キャンパスに移転しました。それに伴い、私どものセンターもここに場所を移しました。手狭にはなりましたが、ここは都市型キャンパスで、2024 年 3 月には、徒歩 3 分のところにある鉄道駅が開業し、大阪市内の主要地区である梅田、難波、天王寺と直通でつながります。もともと商業地域で、これからベンチャー企業なども集まってきますので、今、地域の方々と、多言語多文化共生社会の構築を目指して、留学生教育に、地域課題を探究し解決するための PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）を取り入れるなど、様々な試みを行っています。もしやすると、これが成功すると、日本での新たな社会を作り上げるモデルになっていくかもしれないと期待しているところです。

さて、いま、世界では持続可能な社会の実現を目指して、特に科学技術分野での「イノベーション」が求められています。ただし、もちろん社会構造というものはその分野だけで成り立っているものではありません。科学技術分野のシステムを支える、経済体制や法制度といった社会システムがあり、その下には歴史的基盤ともいえる言語、宗教、慣習、道徳などの広い意味での文化が存在します。下層ほど LOCAL な問題となり、上層に行くほど Global な課題となります。もちろん、これは固定化されているわけでなく、例えば、近年の AI の発展は、社会システムに、そして私たちの価値観にまで影響しますが、逆に、文化が社会システムや科学技術の発展を阻害したり促進したりと、様々な影響を与えることになります。

留学生教育の現場である私どものセンターで、教育・研究のターゲットにするのは、歴史的基盤となる下層の部分です。私の専門は仏教学で、ここで30年間にわたって、日本の宗教について教えてきました。その経験から、今日は日本研究のあり方について考えていることを、私の専門分野での具体的な事例を挙げながら、お話ししていきたいと思います。できるだけわかりやすいように単純化した捉え方をいたしますので、おおざっぱな議論になりますことをご容赦ください。

今日ここで取り上げるのは日本仏教における「行」の問題です。これを俯瞰的に捉える必要を感じたのは「自分の国ではお坊さんは髪を剃っているのに、なぜ日本では髪を剃らないお坊さんがいるのか」という留学生の素朴な疑問に答えようとした時でした。異文化背景をもつ学生は、日常生活においても自国との対比を常に行っており、その中での「気づき」から、私たちは学生からの多くの問いに日々接することになりますが、そこに日本文化の特徴の一端を捉えるための出発点となる問いが潜んでいます。

日本文化の形成過程は外来文化（異文化）の摂取・受容・展開の歴史です。そのなかでも、およそ千年の時を経て、インドで成立した仏教が中国という文化的なフィルターを通して日本に伝わった仏教が果たした役割は大きいと言えます。もちろん、その仏教も、日本という風土の中で展開していきますので、教理的にも言えば、その変容度もまた非常におおきいのですが、一見してもわかりません。

仏教の基本は、教えにしたがい、修行して、悟りを得る、「教行証」です。仏教が、仏道（ブッダになる道）と呼ばれるのはそれが理由です。これは日本の仏教でも同じなのですが、問題は「行」の意味が変化していることです。それに大きな影響を与えたのが、「末法思想」と「本覚思想」の二つです。

「末法思想」は中国より伝わったもので、一種の下降史観です。仏教にとって一番よかった時代はいつでしょうか。それは「ブッダが生きていた時代」です。現代社会で我々の生活を支える科学技術には、当たり前のことなのですが「新しいものほど良い」という考え方が根底にあります。ある種の進歩史観です。それと反対に、「古いほど良い」のが下降史観です。この「末法思想」では、ブッダ

の死後、最初の 1 千年間が「正法」の時代で「仏法が盛んで修行することによって悟りを得ることができる時代」なのですが、次の 1 千年間が「像法」の時代で「修行しても悟りを得ることが難しい時代」となり、それが終わると教えのみが残る「末法」の時代に入り、それが1万年続くというのです。そのあとは、教えも消滅した「法滅」の時代となります。つまり仏教は時を経るにしたがい、退化・荒廃していくことになります。

その末法の時代に入るのは、ブッダの死後の 2001 年目の 1052 年とされ、平安時代の末期は社会状況がかなり不安定であったことから、当時、この考え方は広く受け入れられました。日本の十円玉に見られる有名な平等院鳳凰堂は、1053 年に建立されていますが、それは末法の時代に入ることへの当時の貴族の反応なのです。ここでは見られる仏像は、ブッダではなく、「阿弥陀仏」です。なぜそうなのかは、あとでわかってくるかと思います。ちなみに日本では鎌倉の大仏も有名ですが、これも「阿弥陀仏」です。

そういった状況の中に登場してくるのが、鎌倉時代前半から中期にかけて活躍した浄土真宗の宗祖である、親鸞（1173－1262）です。先に言いましたように、仏教は、教えにしたがい修行して悟りを得る、「教行証」を基本構造とします。修行は日常生活の中では行うことができませんので、もっぱら行をおこなう「出家者」と、日々働き、出家者集団を支える「在家者」とに明確に区別されます。出家者が髪の毛を剃るのもその区別の一つです。しかし末法が修行しても悟りを得られない時代とするなら、これまでの仏教のあり方では対応できないことになります。だからこそ、親鸞は、そこに「信」の要素を取り入れようとします。のちに日本最大の仏教教団となった「浄土真宗」の誕生です。

『無量寿経』という仏教経典によると、法蔵という菩薩が、すべての者を救うことが出来なければ仏にならないという誓い（本願）をたて、修行を重ね、ついに仏となったされます。この仏は「阿弥陀仏」とよばれ、西方のかなたにある「極楽浄土」において現在も教えを説いているといわれます。ここでの仏は、到達目標ではなく、「救済者」です。京都の知恩院にある「阿弥陀二十五菩薩来迎図」は有名ですが、ここでは亡くなる僧侶を迎えに来る「阿弥陀仏」の姿が描かれています。先ほどの平等院鳳凰堂の仏像が「阿弥陀仏」であるのは、それが理

由です。つまり、末法の時代に救済者としてあらわれるのが「阿弥陀仏」なのです。

すべての者を救うことが出来なければ仏にならないと誓って仏になったのなら、私たちはすでに救われているはずなのに、どうしてその実感がないのかと思うかもしれませんが、教理的に言えば、それは阿弥陀仏の本願力を信じていないからということになります。ここに「信」の要素が入り込んできます。自身の修行によるのではなく、阿弥陀仏の本願の力を信じて「極楽浄土」への往生を願う。「行」は「自力の行」ではなく、阿弥陀仏による救済が行、つまり「他力の行」となります。「教行証」の基本構造を変えることなく、「行」にこれまでとは全く違う解釈を加えるのです。

「行」が「自身の修行」でないのなら、出家者と在家者の区別があいまいになってくるのは当然です。信仰は誰においても同じです。その結果として、仏教が堅持していた、修行のための出家主義が崩れ、在家者（生活者）にも救済の道が直接開かれることになり、浄土真宗は拡大し、日本最大の仏教教団として成長していくことになります。だからこそ、今日のように、頭の毛を剃らない僧侶や女性の僧侶がみられることになります。

こういった「信」の導入による「男女の平等」の萌芽は、明治時代における社会システムの近代化を促進した背景になっているのではないかとも言われています。

さて、ここでもう一つの問題にも触れておかなければなりません。それは、「本覚思想」です。現実の事象こそが永遠の真理の生きた姿であるとして、人はもともとから悟っているという考え方で、平安時代中期から仏教界全体に広がっていきます。そうなると現実の世界と仏の世界の区別がなくなり、ブッダになるための「行」は必要がなくなってしまいます。

この問題に苦悩し解決の道を見出したのが、鎌倉時代の禅僧で、曹洞宗の開祖である道元（1200－1253）です。道元は、この世が末法だとは認めず、「教行証」は機能しているとします。しかし、寺院の中での、僧侶の生活（現実世界）そのものが修行であり、修行し続けることが仏としての正しいあり方だと考えます。つまり、「行」と「証」を一体化させることで本覚思想を乗り越えようとします。

だからこそ、例えば、福井県にある曹洞宗総本山「永平寺」に行けばよく分かるのですが、僧侶の生活では、行住坐臥（行くこと・とどまること・座ること・寝ること）すべて修行と捉えられることになります。

このように親鸞と違って道元は出家主義を貫こうとしますが、江戸時代になると非常にユニークな考え方も出てきます。それは戦国末期から江戸初期に活躍した禅僧、鈴木正三 (1579－1655) の職分仏行説です。正三はもともとは徳川家に仕える武士だったのですが 42 歳で出家します。仮名を使った仏教文学の作家としても有名なのですが、武士・農民・工人・商人（士農工商）がそれぞれの職分を尽くすことが仏道に他ならないとする職業倫理（職分仏行説）の提唱者として知られています。正三の「農民日用」には「一鍬一鍬に、南無阿弥陀仏、なむあみだ仏と唱え、一鎌一鎌に住して、他念なく農業をなさんには、田畑も清浄の地となり、五穀も清浄食と成て、食する人、煩悩を消滅するの薬なるべし」という一節がありますが、その意味は簡単です。農民が「阿弥陀仏」の名を唱えながら、田畑を耕せば、それ自体が修行になると言うことです。

これは「世法即仏法」という考え方で、道元は僧侶の生活そのものを「行」とし、それが「証」に他ならないと考えましたが、正三の場合は、当時の身分制における庶民の生活、特にその「労働」にまで「行」を拡大適用します。これによって在家者にブッダになる道を拓こうとしますが、その考えは当時の社会で広く受け入れられたわけではありませんので、影響は限定的です。

とはいえ、ここで重要なのは「教行証」の観点を導入すれば、日本仏教における様々な教理的な動きの根幹が捉えられることです。

最初に申しましたように、日本仏教における「行」の意味を俯瞰的に捉える必要があると考えたのは、異文化背景をもつ学生の「気づき」から発せられた問いがきっかけでした。我々は日々接する彼らからの問いを咀嚼し、研究の視野を広げ、その成果を教育に還元する、留学生教育の現場に求められるのはそういった教育と研究が連動した日本研究だと私は思っています。

もちろん、我が国では、諸外国とは異なり、日本に関わる研究は文学、歴史学、法学、経済学といった人文社会系の領域でかなり細分化された形で行われています。ただし、それだけでは日本の実像に迫れないのではないかという反省か

ら、例えば、日本近代を「グローバルヒストリー」の観点からとらえ直そうとするような、学際性、国際性を具えた「国際日本学」や「グローバル日本学」と名づけられた分野横断的な学問領域を打ち立てる試みもなされています。また、大学での研究開発成果の社会実装（social implementation）が求められるようになり、理系の大学院生にも日本社会に目を向けさせるために、日本学的知識を供与していくことが必要ではないかとの議論も行われるようになりました。

本学でも、2020 年 12 月 1 日に、副学長を長とするグローバル日本学教育研究拠点（Global Japanese Studies Education and Research Incubator）が発足し、人文・社会科学系の各部局でなされているディシプリン・ベースの取組の成果を踏まえつつ、研究面では、「日本」を手がかりとして人文・社会科学の最先端の学問的対話が交わされる新たな学際的・国際的学術プラットフォームの構築を、また教育面では、研究成果を社会実装するための基礎学として「日本学」を位置づける立場から、学際的・社学連携的な教育プログラムを展開し、「日本」発の独創性をそなえたグローバル人材を育成することを、目指すことになりました。

留学生教育の専門機関である私どものセンターもこの拠点に参画し、その発展に大きな期待を寄せていますが、教育と研究をどのように連動させるかが課題となっています。その解決に、教育還元を前提にした、留学生教育の現場での日本研究が何らかの役割を果たせるのではないかと考えているところです。